

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22330064

研究課題名(和文) 経済思想の受容・浸透過程に関する実証研究：人々は経済学をどのように受け入れたか

研究課題名(英文) A proof study of the process of reception and spread of economic thought: How did people receive economics?

研究代表者

下平 裕之 (SHIMODAIRA, Hiroyuki)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：30282932

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は経済学的思考が一般大衆である非専門家にどのように伝播するか、その過程を(1)二世紀という大きな射程で、(2)イギリスに焦点を絞り、(3)質的および量的に特定化・類型化する試みである。本研究は経済学史研究に初めて「テキストマイニング分析」を導入し、経済学者の専門的議論が一般紙・新聞・大衆向けの啓蒙書等で通俗化され受容されていく過程について、テキストデータの定量的把握に基づくデータ解析から得られた知見に基づき分析できることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project is an attempt to qualitatively and quantitatively categorize the process by which economic theory and thought have disseminated from economic specialists to non-specialists, that is, the general public, through the last 200 years beginning with the formation of classical economics, while focusing the research on the history of economic thought in England. This is the first attempt at applying text-mining analysis to the history of economic thought. We have made clear the process of popularization and dissemination of professional economic ideas through the quantitative analysis on text data including textbooks, magazines, newspapers and popular fables.

研究分野：経済学説・経済思想

キーワード：経済思想 受容 デジタル化 量的解析

1. 研究開始当初の背景

経済学史は時代を画す理論そのものを扱う理論史、その理論が生まれた社会背景を問う思想史に大別される。しかし経済理論の社会への影響という観点からは、理論の浸透・伝搬過程の研究も劣らぬ重要性をもっている。

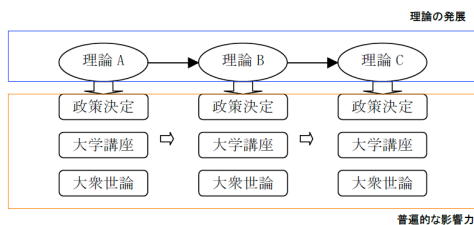
理論の浸透・伝播課程を扱う従来の研究は、以下の点で不十分さを露呈している。第1に、経済的思考の影響力が学界内部の考察に留まり、官界・政界への伝播がまだ完全に解明されていないこと、第2に、最終的に政策形成を支持する世論への浸透力がほとんど視野に入っていないこと、第3に、通俗化を担った活動家(特に女性)のサンプルが少なすぎることである。

2. 研究の目的

本研究は経済学的思考が一般大衆である非専門家にとどのように伝播するか、その過程を(1)二世紀という大きな射程で、(2)イギリスに焦点を絞り、(3)質的および量的に特定化・類型化する試みである。本研究は「経済学の制度化論」および「経済政策思想史」に密接に関連するが、それらが対象外としてきた「経済学の通俗化」「大衆を経由した政策形成論」に着目する。

具体的な一次接近として、その時代で支配的であった詩・寓話・小説・通俗書のデジタル化・量的解析をまず行う。そして究極的には内外の専門知および経済思想の洞察力を総動員し、有力な経済学がどのように変型され受容され、最終的に経済政策や通念として社会を動かす力になったか、このリンクを動的に描きたい。

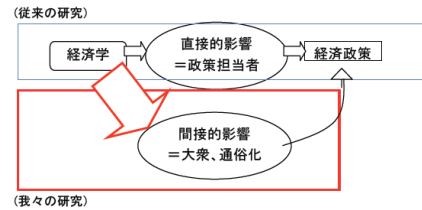
従来の研究は図の上部横軸(理論の発展)に重きが置かれていた。本研究はまず同時代の縦軸(社会への浸透力)を確定化し、次に下部の重層的横軸(社会への通時的・普遍的な影響力)についても、質的および量的に類型化する試みである。



3. 研究の方法

本研究プロジェクトは、経済学の独創的・支配的な発想がどのような経路・形態・媒体によって、最終的に一般市民に届くかという問題を、特に重要な媒体であったと考えられる詩・寓話・小説・解説書に注目し、考察し

ようとする(図の「間接的影響」)。考察の範囲は、18世紀の重商主義から、20世紀中葉の制度化された新古典派経済学に至る時代である。



4. 研究成果

私たち若手・中堅研究者8名は2001年以来、49回に渡って「経済思想研究会」を開催して、内外の研究者・大学院生等と研究交流を重ねてきた。このように形成された研究ネットワークを基に、2010年からの5年間の共同研究において、以下の成果を得た。

(1) 下平・小峯・松山(2012)は初めて経済学史研究に「テキストマイニング分析」を導入し、ケインズ『一般理論』が各媒体(学術誌・一般誌・新聞)に受容される差異を解析し、この成果を経済学史学会第77回全国大会(2013年5月・関西大学)で報告した。

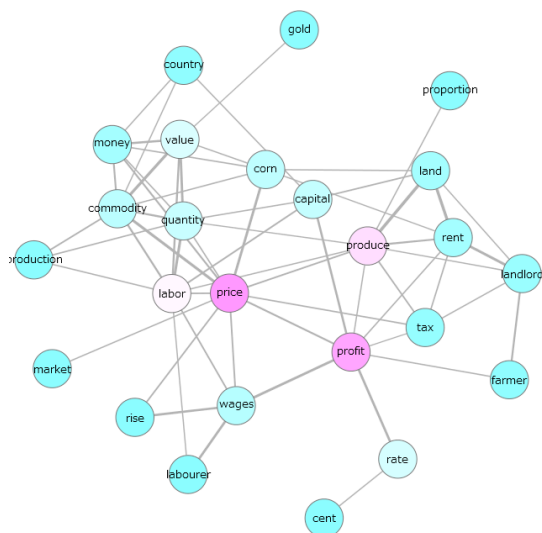
テキストマイニングとは、大量のテキストデータを定量的に解析して、隠された法則の「発掘」を通じて、新しい知見を生み出す技法である。この技法を伝統的な経済学史研究と組み合わせることで、客観性(量的)を担保しながら独創性(質的)を発揮させることになる。

本論文においては、ケインズ『一般理論』の書評集(学術誌・一般紙・新聞)に対し、多変量解析の一種である主成分分析を適用した。この分析の結果、『一般理論』における主要概念全般、ならびに「貨幣・利子・政策」に注目する書評を二つのグループに分けることによって、ある程度は有効な結果が得られた。特に、①媒体の専門性が高まるほど、『一般理論』の主要概念について全般的に着目する割合が高くなる、②新聞書評は『一般理論』のうちで特定の話題(特に経済体制論や社会観)に紙幅を割き、貨幣・利子・政策に注目している(有効需要論を相対的に軽視する)、という2つの重要な結論を導くことができた。

(2) Shimodaira & Fukuda(2014)は共起ネットワーク分析などを用いて、リカード『原理』の専門的議論が、ミル『要綱』で簡略化され、マーティノー『例解』で決定的に通俗化されたことを実証した。またこの成果をマンチェスター・メトロポリタン大学 John Vint 名誉教授を招聘した国際ワークショップ(2014年3月・東北大学)で報告した。

次頁の図は、リカード『原理』を「共起ネ

ネットワーク（中心性）分析」にかけた結果である。この分析は出現パターンの似ている単語同士の関係を、円と直線（その太さ）という視覚で表現する。また色分けされた中心語（price, value, profit 等）も判明するので、例えば「リカードが価格決定や利潤率低下の議論を重視していた」ことが、定量的にも追認できる。



また共起ネットワーク分析により、リカード『原理』で中心的な役割を果たす名詞が、ミル『要綱』では別の名詞に入れ替わり、マーティノー『例解』第 25 話ではさらに別の名詞に入れ替わっていることが分かった。『原理』の中心となっていた価格決定と所得分配に関わる理論的概念に相当する名詞が、次第に、比較的大雑把な現実的概念にその役割を奪われていったと言える。

(3) その他、『国富論』の普及分析、マーシャル『経済学原理』のテキスト解析も行われた。古谷 (2014) の結果によれば、『国富論』で頻出する silver, gold, bank, metal, coin という貨幣論に関わる単語群が、その書評では殆ど出現しない。この事実は従来のスミス研究で指摘されたことはなく、新たな質的分析を促す発見と言えよう。

この技法は応用され始めてから約 20 年と新しいが、文学作品・アンケート・政治談話・自叙伝などを対象とした成果は着実にあがっている。しかしテキストマイニングを経済学史研究に適用した例は世界で初めてである。既に 2014 年 3 月に招聘した Vint 氏からは、欧米での発表を促された。また世界規模のメーリングリスト (SHOE) に仙台の研究会を告知したところ、Angeli 氏 (ブラジル・パラナ連邦大学教授) からテキストマイニングの成果について問い合わせが来るなど、データ解釈の普遍性を指向する本研究の成果が、内外で期待されていることを実感している。

将来的には今回用いられた手法をさらに展開することにより、長年、個別ケースの地道な蓄積や研究者の直観に支えられてきた質的なテキスト分析に、大量のテキストデータを一括して処理する量的分析を組み合わせることによって、より客観的で統一的な、より説得力のある数多くの仮説・知見が発見されると予想される。

この研究手法は普遍的であるため、他分野との協働や交流が可能になる。経済学史研究が「ひらかれる」だけでなく、「経済学は有用だったのか」「どう効果を与えたのか」など、経済学の真価・役割を再認識させる成果を生むだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

① Keiko Funaki “Harriet Martineau’s Illustration of Political Economy: Her Style of Writing on Political Economy”, *The Martineau Society Newsletter*, 36, 2015, pp.19-27. (査読有)

② 古谷豊 「テキストマイニングを用いたスミス『国富論』普及の分析」 *TERG Discussion Paper*, No. 325, 2014, pp. 1-17. (査読無)

③ Hiroyuki Shimodaira and Shinji Fukuda “Popularization of Classical Economics: The Text-mining Analysis of David Ricardo, James Mill, and Harriet Martineau”, *Yamagata University FLSS Discussion Paper Series*, No.2014-E01, 2014, pp.1-21. (査読無)

④ 下平裕之・福田進治 「古典派経済学の普及過程に関するテキストマイニング分析ーリカード、ミル、マーティノーを中心にー」『人文学部論叢 社会科学編』(弘前大学)、31、2014、pp. 51-66. (査読無)

⑤ 下平裕之・小峯敦・松山直樹 「経済学史研究におけるテキストマイニング分析の導入：ケインズ『一般理論』と書評の関係」『山形大学人文学部法経政策学科 Discussion Paper Series』No. 2012-E02、2012、pp. 1-45. (査読無)

⑥ Atsushi Komine and F. Masini “The Diffusion of Economic Ideas: Lionel Robbins in Italy and Japan”, *The Dissemination of Economic Ideas*, 2011, pp.233-259. (査読有)

[学会発表] (計 16 件)

① Yutaka Furuya “James Steuart on the Ancient Economy”, 6th UK History of Economic Thought Conference, 3/9/2014, Westminster University, London.

② Hiroyuki Shimodaira and Shinji Fukuda “Popularization of Classical Economics: The Text-mining Analysis of David Ricardo, James Mill, and Harriet Martineau”, Sendai History of Economic Thought Workshop, 30/3/2014, Tohoku University.

③ 下平裕之・小峯敦・松山直樹 「経済学史研究におけるテキストマイニング分析の導入－ケインズ『一般理論』と書評の関係－」経済学史学会第77回全国大会、2013年5月25日、関西大学。

④ Keiko Funaki “Political Economy and Gender of the Victorian Era from Harriet Martineau to the Kensington Society”, The Martineau Society 18th Conference, 14/7/2012, Ramada Bristol City Hotel, Bristol, UK.

⑤ Atsushi Komine “Why did Keynes Promote Grace I in 1921?”, HETSA 2011, 7/7/2011, RMIT University, Melbourne, Australia.

[図書] (計5件)

① Atsushi Komine, *Keynes and his Contemporaries: Tradition and Enterprise in the Cambridge School of Economics*, 2014, Routledge. (190 ページ)

② Hiroyuki Shimodaira, *Marshall, Marshallians and Industrial Economics*, 2011, Routledge. (325 ページ中 14 ページ担当)

[その他]

ホームページ等

<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~furuya/econthought.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下平 裕之 (Hiroyuki Shimodaira)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30282932

(2) 研究分担者

小峯 敦 (Atsushi Komine)
龍谷大学・経済学部・教授
研究者番号：00262387

福田 進治 (Shinji Fukuda)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：00322925

古谷 豊 (Yutaka Furuya)
東北大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：00374885

船木 恵子 (Keiko Funaki)
武蔵大学・経済研究所・研究員
研究者番号：00409369

本郷 亮 (Ryo Hongou)
関西学院大学・経済学部・教授
研究者番号：80382589

松山 直樹 (Naoki Matsuyama)
兵庫県立大学・経済学部・講師
研究者番号：80583161

金井 辰郎 (Tatsuro Kanai)
東北工業大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：90332022